

第12回 旭川市民文化会館整備基本計画検討会 会議録（要旨）

会議名 第12回 旭川市民文化会館整備基本計画検討会

開催日 令和8年8月5日（水）
午後1時30分から午後3時30分まで

開催場所 旭川市民文化会館 2階 第2会議室

出席者 参加者 全12名のうち10名出席
（敬称略） 大口 優、大谷 薫、大野 恵司、佐藤 淳一
鈴川 雄太、水野 雅文、南 裕一
宮田 健一、森 傑、森 禎宏
事務局 4名出席
社会教育部 文化ホール整備担当部長、主幹、主査
国立大学法人北海道大学

会議の公開非公開の別 公開

傍聴者数 3名

会議資料 別紙のとおり

1 開会

2 報告事項

苫小牧市民文化ホール見学を通して得られた知見・気づき

進行役：

- ・ 本日の議題であるが、前回の議論の続きとして、資料2に示している
- ・ 「【3-3】共用空間について」「【3-4】バックヤード・スタッフスペースについて」「【3-5】その他付加機能について」に関して議論いただきたいと考えている。
- ・ 新文化ホールに求める要素としては、昨年度の検討会において「現在の市民文化会館で行われている活動を継続・発展していく」という考え方を重視する議論があったところであるが、一方で、最近の公共施設では、特定の利用者・利用の仕方に偏らず、柔軟に活用可能な諸室や、いつでも・誰でも、料金や事前の許可を必要とせずに利用可能な「共用空間」と呼ばれるスペース等の在り方が求められることについても、これまで議論の中でたびたび触れてきたところである。
- ・ 以上の視点を踏まえ、先述した議題について議論する前に、本検討会参加者の皆様に参加いただき6月8日に実施した苫小牧市民文化ホール見学会について振り返りたい。

- ・ 同施設は、市民が気軽に訪れ滞在することができ、にぎわいを演出しつつ多様な活動を受け止める余白のある共用部や、様々な活動等に柔軟な対応が可能な諸室など、これまでに本検討会で議論されてきた内容と符合する機能を一つの形として具現化した先行事例であると思う。
- ・ 当該事例について共有することで、本検討会で議論してきた内容は、本当に建物として実現可能なのか、仮に実現可能な場合はどのような形で出力されると想定できるか、といった点について意識しながらお聞きいただきたい。
- ・ 報告は、今回の見学を主催した国立大学法人北海道大学より行わせていただく。

国立大学法人 北海道大学：

- ・ 資料1に基づき、施設の特徴と見学時に参加者の皆様から挙げられた意見等について説明させていただく。

【グランドホール】

- ・ 1,200 席のホールで、客席が2層で扇型の形状であり、舞台上から座席最後列までの距離を短くすることで、後方席でも見やすいよう配慮されている。
- ・ ホールの壁面のリブや庇、舞台上の音響反射板を用いることで、コンサートホールとして必要になる残響時間を確保しているとのこと。
- ・ 見学者からは、とても立派なホールであるが、旭川市ではもう少し席数が必要になるのではないかといった意見があった。

【マルチホール】

- ・ 客席の一部が可動式で、最大 400 席の座席を設置したホールとしても、座席を収納した平土間のホールとしても使用可能な、多用途なホールである。
- ・ 入口からステージ上まで段差なくアクセスすることができ、バリアフリー面の性能が高い点について評価する意見があった。

【アートスペース（1階）】

- ・ 図面上で「多目的室・控室」と記載された、リハーサル室に相当する部屋である。
- ・ グランドホール舞台上と同程度の面積があり、防音・防振性能を備えている。
- ・ リハーサル利用だけでは稼働率を高く維持することが難しいと想定されたことから、簡易舞台等を設置し、公演等の本番でも利用可能である。
- ・ グランドホールのバックヤードへ繋がる動線があり、スタジオとしての利用だけではなく、本番前のリハーサルや楽屋にも利用できるよう整備されている。

【ギャラリー（1階）】

- ・ 全体で約 160 ㎡と、現・旭川市民文化会館の展示室よりも面積が小さい部屋である。
- ・ 可動壁で空間を仕切って使用することができ、3分の1サイズ、3分の2サイズでの貸出も可能である。
- ・ 南側壁面に窓を配置し、更にその奥、外壁との間には回廊が通されている。回廊から中の様子が見えることで、明るく開放的な展示空間になるよう意図しているとのこと。
- ・ 見学に際しては、エントランスホールに入っすぐの場所に位置していることから、来館者の目に付きやすく、訪れやすい配置である点を評価する意見があった。

【キッズルーム・託児室（1階）】

- ・ 建物の出入口付近に、2室が隣接する形で配置されている。
- ・ キッズルームは、開館時間中いつでも自由に子どもたちが入室し、遊ぶことができる。
- ・ 託児室は、必要に応じて公演の主催者に対して貸出を行い、主催者側において保育士等を手配する運用になっているが、日本では子どもを預けて公演を見るという文化が定着しておらず、現状において利用率は低いとのこと。
- ・ 見学に際しては、託児室に子供を預けて公演を見に行くといった文化が将来的に根付いていくように、建物を建てて終わりではなく、施設と利用者が共に成長していくような運営を実現できると良いといった意見があった。

【和室（2階）】

- ・ 茶道や華道、伝統芸能の稽古等での利用が想定されているとのこと。
- ・ マルチホールのホワイエからエレベーターで2階へ上がると、スロープを使って段差なく和室内へ入ることが可能であり、バリアフリー面の配慮もされている。
- ・ 茶道等の道具については備え付けられておらず、利用者が流派に応じた道具を持参するという形式になっている。
- ・ 見学に際し、公共施設である以上、特定の団体に特化した形で整備することは難しく、多用途に使えるよう整備する必要があるのでは、との意見があった。

【ピアノルーム（1階）】

- ・ ピアノ庫に隣接する「練習室兼ピアノ庫」と記載された部屋で、ピアノが常設された防音の活動室である。
- ・ ピアノを使った活動に限らず、合唱やその他の楽器演習など、様々な練習で利用されているとのこと。

【スタジオ（2階）】

- ・ 図面上に「音楽スタジオ」「活動室4」「ダンス練習室」として記載され、二重線で囲われた部屋。いずれも2重扉で防音性能が確保されており、音楽やダンス・バレエなど、様々な音を伴う活動で使用されているとのこと。
- ・ また「活動室4」と記載された部屋は、扉が2方向にあり、一方はグランドホールのバックヤードに繋がっているため、楽屋としても利用することが可能である。

【ルーム・アトリエ】

- ・ 「活動室1・2・3」と記載された部屋がルーム、「美術創作室1・2」と書かれた部屋がアトリエである。
- ・ ルームは一般的な会議室に相当する部屋であり、アトリエは手芸や陶芸、木工作業等に使用できる専用設備が設けられた部屋である。

【共用空間】

- ・ 2階の和室やスタジオ、ルーム、アトリエといった活動室の前には「コラボスペース」と呼ばれる共用空間が配置されており、椅子・テーブルを配置することで、日常的な滞在のほか、活動の順番待ち時の待機場所としても利用されるなど、多様な滞在場所として、本施設の要とでも言うべき要素になっている。
- ・ 1階ギャラリーを取り囲む回廊には、コンセント付きの電源設備が設けられた机が配置されており、休憩だけでなく、自習やパソコンを使った作業など、長時間の滞在・利用が可能となっている。

- ・ ホワイエの南側に面した階段を上った先、最上部にはボルダリングスペースがあり、年代を問わず市民が日常的に利用しやすい共用空間となっている。見学時には子どもたちが声を上げて遊んでいたことから、従来のホールにおけるその印象とは異なり、カジュアルで親しみやすく、利用しやすい施設だと感じたといった意見も示された。
- ・ 1階南東に位置するエントランスロビーでは、諸室に設けられた窓から内部の活動が見え、施設を利用したくなるよう雰囲気が演出されていた。段差や回廊などが配され、回遊性のある空間を回るのが楽しい一方、現在地がわかりづらくなるといった意見もあったが、ネオンサインのような案内表示が分かりやすく、目的の場所を把握しやすかったという感想もあった。
- ・ ホワイエは公演時の滞在スペースとしてだけでなく、収納が可能なバリカーを使い、公演時のみ、チケットもぎりのラインを形成する構造になっており、公演がない時は市民が日常的に通行・滞在可能となっている。見学時には1,500席程度の大ホールを想定した場合、入場待機列を並ばせるには少し狭く感じることから、旭川では苫小牧よりもホワイエの面積が必要になるのではないかといった意見があった。

【バックヤード】

- ・ 楽屋は採光を確保した明るい空間になっているほか、通路幅が広く搬出入に適している点や、ホールへ入る前に大きな鏡があるなど、主催者側の使い勝手に配慮されている点を評価する意見があった。
- ・ 搬出入口は11tトラックが最大3台駐車可能であるが、実際に施設を運用する上では、人が出入りするのための小さな扉も設けた方が良かった、との話もあった。
- ・ 事務室はエントランスロビーに面しており、来館者が場所を把握しやすく、アクセスしやすい配置となっている。

【カフェ】

- ・ ホールの利用者だけではなく、共用空間の利用者にも利用可能な配置である。
- ・ 共用空間では飲食が可能であるため、施設全体の日常利用を促す要素の一つになっているとのこと。

【見学を通しての報告者の感想】

- ・ 各諸室前に机や椅子が置かれている「コラボスペース」が、催事を待つ時間や滞在時の居心地の良さを演出しており、日常的に訪れたい施設であると感じた。
- ・ バックヤードに関しては、楽屋に窓があり外部に面している点や、廊下が広い点など、主催者の利便性や心地良さも確保されており、最新ホールの性能の高さを実感した。
- ・ 共用空間以外に、ルームやアトリエ、ピアノルームといった多目的に利用可能な活動室があることで、日常的に利用したくなる施設になっていると感じた。
- ・ ルームや和室などの諸室において、利用者と主催者の動線が混在しないよう配慮されており、楽屋としての利用も可能である点が優れた施設であると感じた。

進行役：

- ・ 報告から、当然ながら旭川において想定される機能・規模とは異なる部分もあるが、先述したとおり、特に共用部や諸室機能に関しては、市民の気軽な利用を促す点や、様々な活動等への柔軟な対応など、これまで本検討会において議論されてきた内容と符合する要素を実現している様子や、実現するための工夫等が見て取れたのではないと思う。
- ・ 以上のような点を踏まえつつ、報告内容に関して質問・感想等があれば伺いたい。

参加者：

- ・ 4つの施設を統廃合した建物であるためか、公民館にありそうな工作室など、市民が日常的な活動で利用することを想定した諸室が豊富であると感じた。
- ・ 共用空間についても、相当数のテーブルと椅子が方々に配置されており、訪問時にも人々が集まって会議をしていたり、パソコンで作業している姿などが実際に見られ、こうした空間があることは非常に良いと感じた。

進行役：

- ・ 苫小牧市民文化ホールでは、国立大学法人北海道大学の建築計画学研究室が基本構想及び基本計画の策定支援を担当したが、これらの検討段階において、交通安全センターの免許更新機能を集約することは、ポジティブな要素として捉えられていた。
- ・ これは免許更新のために毎日様々な属性の人々が施設を訪れることで、他にも様々な諸室があることに気付いてもらい、利用を広げることを狙いとしたためである。

参加者：

- ・ 見学会には参加できなかったため、写真で見た限りであるが、建物の角が全てアールになっており、柔らかい雰囲気が感じられた。

進行役：

- ・ 実務的な視点から言えば、角が丸いと物の収まりが悪くなるため、全部の角までは丸くしなくても良かったのでは…との話もあったが、柔らかさや親しみといった要素は非常に良く表れているように思う。

参加者：

- ・ 現・旭川市民文化会館と苫小牧市民文化ホールとでは、どのくらい面積が異なるのだろうか。
- ・ また、グランドホールに人が収まりきらないときに、グランドホールの映像をマルチホールに投影するといったことは可能なのだろうか。

有識者：

- ・ 苫小牧市民文化ホールの延床面積は約12,000㎡であり、現・旭川市民文化会館と同程度。苫小牧のグランドホールが1,200席であり、旭川の大ホールに比べ300席ほど少ないため、ホールが占める面積は旭川の方が広いものと思われる。
- ・ グランドホールとマルチホールの映像接続に関しては、常設設備はないはずであるが、必要に応じて配線を設置することで対応可能と思われる。
- ・ なお、楽屋でホール内の様子をモニターするITV設備は常設している。

進行役：

- ・ 投影面積という意味では、旧・旭川市役所総合庁舎跡地に苫小牧市民文化ホールの建物がちょうど収まる程度の規模感になる。

参加者：

- ・ 実際に施設を見た上での率直な感想として、とても素晴らしい建物であったと思う。
- ・ やはり建物の絵が見えてくると、一段と関心は高まるように思う。旭川においても、現段階では言葉や文章での表現しかないが、実際に新しいホールが完成したときには、市民に大きな感動を与えられるのではないかと改めて感じた。

- ・ ホール自体がとても素晴らしく、グランドホールではクラシック音楽番組の公開収録が行われるなど話題性があり、マルチホールも多様な使い方が可能となるよう工夫されていた。当該事例を旭川の新ホールにも応用することができれば、単なるホールではなく、市民に様々な目的で有効活用してもらえる施設になるのではないかなと思う。
- ・ ビオトープなど過去の敷地の名残を残すものがあり、まちの文化を継承するというストーリーが感じられ、そうした点も良いと思った。
- ・ 諸室に関しては、音楽系の活動に際して他の活動を阻害しないよう、会議室よりももう少し密閉された、防音性能を有する空間を整備する必要があると改めて感じた。

進行役：

- ・ 苫小牧市民文化ホールにおいては1階の「ピアノルーム」が音の出る活動で使用可能な防音室であり、ピアノに限らず少人数での音楽活動で使用可能とのことであった。
- ・ また、2階の音楽スタジオも防音性能を有している。

参加者：

- ・ ボルダリングをしている子どもたちやカフェを利用する方々など、日常的に市民に利用されている様子を見ることができたのが良かった。
- ・ 市民にとっての使い勝手の良さを優先して整備することができれば、おのずとコンベンションの際にも利用されると思うし、旭川の良さを伝えることにも繋がっていくのではないかなと感じた。

参加者：

- ・ 多目的に使用可能なマルチホールの完成度が高いと感じた。合唱コンクールの全道大会を例に考えると、ホールで本番を行い、ほか2か所ほどでリハーサルを行う必要があるが、苫小牧市民文化ホールであればマルチホールやアートをスペースを活用できると思われる。両室からグランドホールへの動線もよく考えられていると感じた。
- ・ 託児機能に係り、子どもを預けて演奏会等に参加するという文化が根付いていないとの話もあったが、一方で、そうした文化を根付かせていくためにあえて整備し、利用いただくことで文化を育てていくという考え方は、良いアイディアだと感じた。

進行役：

- ・ 公共施設には、身障者用のトイレ整備や託児所の設置等に関して、どれくらい先まで見据えてどのような街にしたいかという自治体や市町村の価値観が反映されるように思う。是非、旭川市にもプライドを持った価値観で整備を進めていただきたいと思う。

参加者：

- ・ よく考えられた、素晴らしい施設だと感心しながら見学させていただいた。
- ・ 旭川と比べたときに羨ましく思うのは、敷地が広い点である。仮に、旧・旭川市役所総合庁舎跡地に苫小牧市民文化ホールのような建物を建てようとした場合、関係者用駐車場やトラックの転回のスペース等を確保するのが大変なのではないかなと感じた。
- ・ 将来的なことを考えると、中央公民館を統合してキッチンのある部屋を新しいホールにつくるというのも面白いのではないかなと思った。
- ・ 諸室機能に関して、旭川市役所の各庁舎では、市民等に会議室の貸出はしていない。コンベンション利用時や、楽屋・音出しのための利用等を考えると、必要となる諸室を敷地内に収めることができるのだろうかという点は懸念している。

進行役：

- ・簡易的な水回りや熱源を扱える設備があると、活動の幅が広がることから、そうした機能が施設側にあっても良いと思う。
- ・敷地の広さについては、御指摘のとおり余裕があるわけではないため、ゾーニングや建物の計画のバリエーションは少なくなると思うが、必要な諸室を収められないといったことはないと考えている。

参加者：

- ・託児機能に関して、大雪クリスタルホールの自主文化事業では、公演時間中、会議室に保育士が常駐するという対応を過去に行っており、毎回一定の利用があったように思う。こうした取組は30年くらい前から行われていたと思うが、新型コロナウイルスの感染拡大以降、実施は少なくなっているように感じる。
- ・イベント主催者が託児を行いたいと考えたときに、主催者がゼロから体制を整えるのは大変だと思うが、施設側が自主事業等に際して実施している状況を見せていれば、他のイベント主催者もそれに倣うことができると思う。
- ・また、ホワイエが開放されて子どもたちに使われている様子を見て、ホワイエも日常利用ができると良いと感じた。

参加者：

- ・ホールの客席が扇形だが、演劇等に際しては、座席によって見切れが発生してしまうと思われる。一方で長方形にすると、舞台袖が確保できなくなってしまうように思う。
- ・グランドホールにオーケストラピットはあるのだろうか。
- ・バトンや緞帳の昇降については、手動の方が精緻な動作指定が可能だと思われ、手動と電動を併用している施設もあるようだが、苫小牧では全て電動なのか。

進行役：

- ・グランドホール客席の形は、舞台上から客席までの距離を優先した設計となっている。

有識者：

- ・グランドホールにオーケストラピットはないが、前方の座席を取り外し、客席と同じ高さレベルの平場にすることは可能である。オープニングイベントに際しては、当該スペースを用いて演奏を行っていただいた。
- ・バトンや緞帳の昇降は、全て電動である。

進行役：

- ・報告のあった見学記録は、現に利用されている状況についての内容であるが、過去に北大が策定を支援した苫小牧市民文化ホール整備に係る基本構想・基本計画では、「将来的にこういった活動／使いこなし方をしていきたい」といったアイデアを多数議論したところであり、それら議論が当該施設のオープニングイベントにも生かされている。
- ・そこで、苫小牧市民文化ホールの運営事業者の一員として、オープニングイベントの企画・運営にも携わった有識者より、イベントの概要について紹介願いたい。

有識者：

- ・ 苫小牧市民文化ホールは、令和 8 年 3 月 1 日（日）に開館したが、前日の 2 月 28 日（土）には、事前に招待された関係者や文化団体等が参加する記念式典を行い、市民吹奏楽団による記念演奏、ロビーコンサート等を行った。
- ・ 翌 3 月 1 日はオープンデーと題し、誰もが参加可能なイベントとして、館内各所で様々な文化団体等による催しを開催した。
- ・ グランドホールでは市内高校によるマーチングコンサートが行われる一方、マルチホールは客席の一部を収納し、平土間形式でライブと DJ イベントが行われた。
- ・ ギャラリーではクラフト系のマルシェ、活動室では飲食系のマルシェが行われた。スタジオでは仮設スタイロ畳を敷き下の句かるた体験、アトリエでは美術博物館と連携した新聞ワークショップ、和室では呈茶が行われた。
- ・ 共用空間ではコンサートや書道パフォーマンスが行われたほか、市民が参加して制作されたアート作品の展示なども行われた。
- ・ 屋外ではキッチンカーによるフード提供や、移動図書館でのサービス提供が行われた。
- ・ 館内では、ホール内を除きどこでも飲食可能であることから、自由に滞在し飲食している方や、館内の机・椅子で談笑する方、ボルダリングスペースで遊ぶ子供たちなど、さっそく多くの方が思い思いに過ごしている姿が見られた。
- ・ オープンデーの来館者数は約 6,000 人と盛況であり、多くの市民に施設に対する関心や親しみを持ってもらうきっかけになったものと感じている。

進行役：

- ・ オープニングイベントは、市民に施設の様々な使い方を知っていただくための大切な機会になると思う。様々な使い方の事例を知っていただくことが、その後の市民等による施設利用の幅を広げていくきっかけになる。
- ・ 今後、当該施設がどのように使いこなされていくか、関心を持って見ていきたい。

参加者：

- ・ 苫小牧のオープニングイベントは、多岐にわたる市民文化団体の協力を得て開催されたものと思うが、どのような形で各団体等との話を取りまとめたのだろうか。

有識者：

- ・ 当該オープニングイベントは、苫小牧市民文化ホールの自主事業として開催したものであり、企画等は全て施設の職員が行った。携わっていただいた市民の方々は、市や旧施設の職員等に紹介いただいたが、開館後も継続的に、自主事業での連携や施設を利用いただきくことにつなげていきたいという思いのもと、ネットワークをしっかりと構築していくことに留意した。
- ・ 施設として非常に注力したイベントであり、企画には 1～2 年ほどを要している。

進行役：

- ・ 苫小牧市民文化ホールは PFI 手法で整備されているが、当該手法では施設を自治体に代わって管理運営するチームとして SPC と略される「特別目的会社」を設置する。
- ・ 苫小牧市民文化ホールの場合、施設の稼働を高めていく上でオープニングイベントが非常に大切であると SPC が認識していたため、市や関係団体等と連絡を取りながら、工事期間中の 1～2 年で準備していたようである。

- ・当該事例から見て取れるように、SPC が運営を担うということは、ハードの設計・施工をしながら運営・ソフト面の準備を進めることができるというメリットがある。どのような整備をするのか、体制を作っていくのかによって、その先の活動の流れは大きく変わってくる。
- ・苫小牧市民文化ホールでは基本構想・基本計画の検討・策定に際して様々な活動主体の方々に参加いただいていたおり、そうした方々に市を通じて SPC から連絡していると思われる。旭川においても、本検討会のネットワークが将来的な施設の活動内容に関わっていけるポテンシャルを有しているのではないかと感じている。

3 議事

整備事業の方向性から想定される諸室とその位置づけ・性能

事務局：

資料4「現施設利用状況の分析」に基づき説明

進行役：

- ・事務局から提示された利用実態等の分析を踏まえると、不足しているから室数を増やすという考え方ではなく、現状をベースとしながら、将来的な利用方法や現状把握されているニーズに対応できる柔軟性を持たせることが重要と考えられる。
- ・これまでの検討会で出された意見と大きく方向性が異なるものではなく、今回の分析により、これまでの議論について、根拠を持って整理できたと感じる。
- ・特に、部屋の数だけではなく、今後の多様な活動に対応できる性能を確保することが重要になるものと思う。

参加者：

- ・異論ではないが、諸室機能については、周辺の公共施設として、神楽公民館や中央公民館などの公民館等が提供している機能も含めて、不足している機能を考える必要があると思う。
- ・合唱等の活動を行う立場からすると「会議室」という体裁ではなく、音を出すことができ、ある程度の規模でミニコンサート等にも使用できる施設が不足していると思う。一部、神楽公民館に「木楽輪」はあるが、その程度という現状である。
- ・新施設では、防音性能を重視し、多目的に利用できる部屋をある程度確保することが望ましいと考える。

進行役：

- ・防音性能については、会議利用を想定した際にも有用であり、今後の活動の多様性を考える上で重要な性能になると思う。
- ・頂戴した御指摘からも、やはり単純に室数を増やすのではなく、多様な活動に対応が可能な性能を備え、柔軟に使える諸室として整備することが重要と考える。
- ・その他、説明内容及びお示しした結論に異論等はないだろうか。

参加者：

- ・異論なし。

進行役：

- ・ それでは、ここまでの説明を踏まえ、最後に資料２・３に基づき、諸室にどのような性能が求められるか確認願いたい。なお、今回配付した資料２・３は、前回検討会で配付した資料４・５と同一の内容である。
- ・ まずは資料２に基づき説明する。【３-１】ホールについては前回確認・議論いただいたので、【３-２】から【３-５】について御覧いただきたい。
- ・ 例えば【３-２】小規模諸室についてであるが、「小規模諸室」とは具体的にどのような室を想定しているかという点、「関連諸室」として記載した展示室、会議室、和室、音楽室、ダンススタジオ、ワークショップリーム、アトリエ、調理スペース、キッズスペース、サポーターズルーム等になる。
- ・ これらの室について、基本構想に定めた４つの基本的な施設機能である「鑑賞・活動・交流・発信」の視点から、諸室に求められる性能の考え方・方向性について整理した内容を記載している。
- ・ 資料３では、右列「これまでの議論から想定される諸室」において、資料２で整理した考え方・方向性に基づき、さらに細かく個別の要素について記載している。
- ・ なお、資料２・３に記載した具体的な諸室は、あくまでもこれまでの検討会での議論から想定される可能性として例示したものであり、全て整備することを想定したものではないことは、前回の検討会でも御説明したとおりである。
- ・ 本議論において確認したい点、基本計画として想定すべき点は、あくまでも「諸室に必要な性能」の考え方であり、具体的な諸室の仕様・設え等までを決定しようとするものではない点に留意いただきたい。
- ・ 以上の点を踏まえ、資料２・３に整理した諸室の性能や必要性について、改めて異論等をお持ちの方はおられないだろうか。

参加者：

- ・ 異論なし。

進行役：

- ・ 次回の検討会では、今回整理した諸室の必要性や性能について、おおよそどの程度の面積が必要になるかといった点等を加えてお示しできればと考えており、そうした内容を踏まえ、基本計画として取りまとめていくことを想定している。

４ 閉会